

連載コラム 『松之山の暮らし』（第2回）

星野夏海 新潟県十日町市地域おこし協力隊

先生を連れてこないでくんネかい

「先生」は私が高校2年生の頃の社会科担当の教師である。定年の1年前に退職し、新潟県の松之山に暮らすシゲヨシさんに弟子入りした。そして年に3回程先生は私たち教え子をこの地域に招いた。シゲヨシさんの指導の下、みんなで田んぼづくりをしたのである。「みんなで五畝」と呼ばれたその体験は2015年から2019年まで続いた。

声の大きな「先生」は猫背の私にこう言った。

「ホシノ、失われた自分は取り戻せる。人生を『よく生きる』ためには大切なことがある。」

十日町市の協力隊では「世話人制度」がある。世話人は担当地域の中から選ばれ、協力隊の日常生活の相談や、隊員が地域に馴染めるようにサポートをする立場にある。タケオさんは私が協力隊になる前のお試しとインターン期間からの世話人で、彼の配慮により様々な行事に参加できた。収穫祭、しめ縄作り、新年会、どんど焼き、相撲星取大会などである。写真を通して行事の一部をみなさんにご覧いただこうと思う。

水梨集落：しめ縄作り

各集落には神社があり、みんなで作った一つのしめ縄を奉納する。私を含めて8名が参加し、70代が中心となって若者へ指導した。紙垂作りもあったが、私が作った紙垂はちぐはぐなことになったので今回は見送りとなった。「出来上がったし



め縄を撮影します。」と声をかけると、ブルーシートの上の散らばった藁を片付けてくれた。



小谷集落：どんど焼き

この行事の名称は複数あり、どんど焼きの他、「ぼうぼう焼き」、「さいのかみ」と呼ばれていた。初めて聞いたときはすべて別の行事なのかと思って驚いた。

小谷集落には三省ハウスという1955年に建てられた木造校舎をリノベーションした宿泊施設があり、小正月のツアー客も見学にやってくる。



水梨集落：相撲星取大会

インターン期間中印象的だった行事がある。それは水梨集落での相撲星取大会である。タケオさんの提案で私を含めて13名の参加者の似顔絵を描いてプレゼントしたことが特に喜ばれた。

行事の内容は1月に行われる大相撲初場所の勝敗を当て、点数の多い人が勝ちという非常にシンプルなものだ。投票は集会所で行われ、毎日集まって交代で点数係をやる。他の人は一杯飲みなが

ら相撲の勝敗を見守るのだ。



大荒戸集落：秋祭り

大荒戸集落では高齢化により冬は行事を行わない。4月の本採用からは道普請や神社掃除といった行事に参加し、秋祭りの際は集会所に集まって私を含め9名でお話をした。せっかくなので活動中に撮影した写真を印刷してノートに張り付けたものを見てもらった。人物の写真は特に喜ばれ、話題作りにも役立った。



ふと、過去を思い出す。私は中学生の頃から教室にいることが苦痛で、クラスメイトの視線や声が怖かった。学校ではいつも一人で過ごし、自分からはほぼ一言も発さず、誰とも目を合わさない子どもだった。無力さと憂鬱さが心に根付いた頃、私は毎日『一刻も早く消えてなくなりたい』と思うようになった。

そんな自分が今はここで暮らしている。

私が初めて参加した行事は『収穫祭』と呼ばれ、かつては農家を中心に行われたらしいが、人口減少に伴い集落内の人だったら基本誰でも参加自由となった。収穫祭といっても男性を中心にした飲み会で、私は小さくなってその会の様子を観察していた。タケオさんは言った。

「さあ、皆さんにお酒を注いでコラッシャイ。」

私は酒を注ぐ行為について漠然とした嫌悪感を抱いていた。人に媚びている印象があったから

だ。私はなぜ酒を注いで回るのか質問した。

「皆さんに顔と名前を憶えてもらうためだよ。」

やがてどこからか声が聞こえた。

「若い女性に酒を注いでもらうのはいいなあ。」

「ここで暮らすのなら子どもを5人産んでもらわなきゃなんねえな。」

楽しそうな笑い声が、更に私のこころを置き去りにしたのを覚えている。

ジェンダーバイアス。恥ずかしながら私がこの言葉を知ったのはここ数年以内のことだ。きっかけは友人の当時小学5年生の娘さんと学校のことでお話しをしていた時のことだ。彼女は言った。

「学校でね担任が、『走る速さは普通、男子の方が女子よりも早い。』と言ったんだよ。信じられる？『普通』とか『男子だから、女子だから』とかなんの？性別なんか関係なくない？？」

私はびっくりして、とっさに何も答えられなかった。しかし彼女の父である友人は嬉しそうに、でも静かな口調でこう言った。「それはね、ジェンダーバイアスといって、性別の違いで無意識に偏見を持つことだよ。」

「ホシノ、ソッケな態度じゃあ面接に受からねスケ、もチッとリラックスしてソネ。笑顔で。」

そう言ってタケオさんは私を励まし、「それから」と少しの間のあと言葉を続けた。

「それから、先生を連れてこないでくんネかい。オマさんは独身女性だスケ。それに、オマさんも自立しなくちゃなんねヤスケ。」

インターンの最終日、私は「先生」と共にタケオさんの他に世話になったもう一人の人物にお礼を言いに行った。先生の知人である彼の屋号は「重助」と呼ばれていた。(つづく)

